

**令和3年度
常葉大学 地域連携事業
実施報告会**

(令和3年 9月7日)

目次

常葉大学地域連携・交流推進基本方針	2
-------------------	---

地域交流・連携推進事業 概要	4
----------------	---

地域交流・連携推進事業（令和2年度 採択事業）

事業1. 静岡市の東静岡にぎわい創出事業への支援	6
--------------------------	---

事業2. 下田市における「チーム学校」を実現する 支援員の資質・能力向上モデルの在り方	8
--	---

事業3. 多文化共生社会実現に資する外国人住民への支援及び 日本人住民の意識涵養事業	10
---	----

事業4. スポーツによる地域活性化を目指した 「ベルテックス静岡」との連携事業	12
--	----

教員による地域連携活動（動画配信）

常葉大学「教員による地域連携活動〔動画配信〕」のご案内	16
-----------------------------	----

事例1. あそぼうあそぼう ABC at リンク西奈	17
----------------------------	----

事例2. With コロナ時代に求められる駅前広場の将来像の提案	18
----------------------------------	----

事例3. 島田市田代地区の自然環境保全対策 PR	19
--------------------------	----

事例4. FULL-SAT0 プロジェクト	20
-----------------------	----

事例5. 防犯・交通安全アプリを活用した 「しずおかランニングパトロール」の実践活動事例	21
---	----

事例6. 地域における音楽指導活動 ～吹奏楽、管弦楽～	22
-----------------------------	----

学生による地域連携活動（事例報告）

事例1. 文部科学省「大学による地方創生の取組事例集」に取り上げられました	24
---------------------------------------	----

事例2. オリパラ教育推進事業 浜松市内小・中学校での活動を実施	25
----------------------------------	----

事例3. 「草薙カルテッド」の活動を紹介するマップとポスターを作成	26
-----------------------------------	----

事例4. 「静岡市民文化会館のミライを描く」市民ワークショップに参加	26
------------------------------------	----

常葉大学地域連携・交流推進基本方針

〔平成 27 年 12 月 14 日制定〕

1. 地域連携・交流の基本理念

常葉大学（以下「本学」という。）の 3 つの教育理念（知徳兼備、未来志向、地域貢献）の実現に資する「ナショナル～ローカルな次元」の地域連携・交流にかかる諸活動を積極的に支援・推進することを通して、「美しい心情をもって、国家・社会・隣人を愛し、堅固な意志と健康な身体をもっていかなる苦難にもうち克ち、より高きを目指して学び続ける」（常葉学園「建学の精神」）人間像の具現化を図るとともに、地域社会の活性化・進展に資するものとする。

2. 地域連携・交流の目的

本学が取り組む地域連携・交流は、地域社会の動向やニーズを的確に捉えて、地域社会の人的基盤を支え、地域社会や地域経済の発展等に寄与することを目的として、次に掲げる事業等を展開する。

- (1) 地域の活性化等を担う人材の育成
- (2) 地（知）の拠点としての大学の役割・機能の発揮
- (3) 本学の資源を活かした地域社会に対する協力・支援
- (4) 産官学連携による地域連携・交流事業の展開
- (5) 地域連携・交流に関する学内の機運醸成

3. 地域連携・交流の基本原則

本学が取り組む地域連携・交流は、以下の諸原則のもとで行うものとする。

- (1) 効果性：本学の 3 つの教育理念の実現に対し効果的であると認められるもの
- (2) 組織性：全学的ないし学部・学科等の単位で組織的に実施するもの
- (3) 計画性：中長期の展望のもとで計画的に事業を実施するもの
- (4) 公平性：交流事業への参加の機会が学生・教職員に平等に開かれていると認められるもの
- (5) 互恵性：連携先と互恵的な関係性のある事業を実施するもの

4. 地域連携・交流の事業内容

本学が取り組む地域連携・交流の事業内容は、次のとおりとする。

- (1) 地域の活性化等を担う人材の育成
 - ① 地域人材の育成のためのカリキュラム・授業内容の充実
 - ② 正課内外での地域貢献活動の実施

- ③ 学生の地域での就労促進
- ④ 卒業生に対する継続的な学習機会の提供
- (2) 地（知）の拠点としての大学の役割・機能発揮
 - ① 教育研究成果の情報発信及び成果還元
 - ② 多様な学習機会の提供
 - ③ 社会への提言活動
 - ④ 学生の人的資源の活用
- (3) 産官学連携による地域連携・交流事業の展開
 - ① 共同研究(商品開発等)の実施
 - ② 地域課題解決のための共同事業の実施
 - ③ 起業及びベンチャービジネス等への支援活動
 - ④ 地域活性化のためのイベント・実践報告会等の実施及び支援
- (4) 地域連携・交流に関する学内の機運醸成
 - ① 実践報告会・シンポジウム等の開催
 - ② 実践事例集の作成・刊行
 - ③ 研究推進、教育改善等に対する連携・交流事業の効果検証

5. 地方自治体、各種団体等との連携・交流協定の締結

地域の特性及びニーズに応じた地域連携・交流事業を展開するため、地方自治体、各種団体等との連携・交流協定の締結を促進する。

6. 自己・外部資金を活用した地域連携・交流事業の実施

本学の専任教職員が基本理念・基本原則に沿った地域連携・交流活動を主体的に推進することができるよう、学内における助成金の交付、外部資金への応募を促進する。

7. 地域連携・交流にかかる推進組織及び環境整備

- (1) 地域連携・交流の充実及び円滑な推進等を図るための学内体制を構築する。
- (2) 地域連携・交流事業の充実を図るため、学内外の関係者から成る連携推進組織を整備・運営するなど、連携推進体制及び環境の構築を進める。

地域交流・連携推進事業 概要

本事業は、本学の教職員が個人およびグループで地域住民や関係機関等と連携を図って地域との交流・連携事業の取組みに対して支援（所要経費の一部を交付）をするものです。

助成要件及び条件

地域の活性化又は発展に貢献又は寄与するもののほか、次のすべてに該当し、大学としてのメリット又は効果があると認められるものに対して補助をする。

- (1) 事業の効果が本学の教育・研究に反映若しくは還元されるもの又は地(知)の拠点である大学として相応しいと認められるもの
- (2) 本学が主体性をもって実施するもの（単なるボランティア活動又は行事への協力は対象外とする。）
- (3) 一過性のイベントや行事ではないこと
- (4) 地方自治体、民間企業・団体又は地域団体等から資金、人的な支援又は協力等が得られるなど、地方公共団体等との共同又は連携が明らかであるもの

助成対象事業

次のいずれかに該当する事業に対して助成をする。

- (1) 地方自治体及び民間団体等と共同又は連携して、地域活性化等を図ることを目的として実施する事業
- (2) 本学の研究成果等を地域に還元又は情報発信（成果の報告又は発表等）することを目的として実施する事業
- (3) 産官学(産学又は官学も含む。)連携により地域や産業の活性化等を図ることを目的として実施する事業
- (4) その他学長が特に認める事業

交付対象金額

1 事業に対して、原則として 500 千円を上限とする。

地域交流・連携推進事業
～令和２年度 採択事業～

静岡市の東静岡にぎわい創出事業への支援

学生による「東静岡アーツ&スポーツ／ヒロバ」でのイベント開催、賑わい創出事業

事業担当者

教育学部生涯学習学科 堀切正人（代表）、教育学部生涯学習学科 白木賢信

教育学部生涯学習学科 鈴木守、教育学部生涯学習学科 田井優子、教育学部生涯学習学科 那珂元

目的・概要

静岡市は、長年活用案が定まらず空き地となっている東静岡駅北口市有地の利活用を懸案としている。そこで本活動は、若者ならではの発想力と行動力で、市民対象のワークショップイベントを開催することにより、この地に、にぎわいを創出し、もって大学として地域課題に貢献しようとするものである。なお本活動は、本助成事業に平成30年度、31年度と採択され、本年は3年目となる。



〈現場と実施状況の全体写真（2020.12.6）〉

事業内容・方法

市有地「東静岡アーツ&スポーツ／ヒロバ」を会場とした一般市民対象の創作ワークショップを学生が企画し、実施した。まず大学内では教育学部生涯学習学科と造形学部の博物館実習生を中心とした学生36名を募り、現地見学、企画案提出、実施体制・スケジュールなどの立案作業を行った。当地を所管する静岡市まちは劇場推進課、静岡市文化振興財団等と連携しつつ、市ほかとの企画調整会議を経て日程と企画を決定し、教員監督のもと、学生の手によりイベントを実施した。

ワークショップの内容は、「にぎわい創出」を目的に、できるだけ多くの一般市民が誰でも自由に参加できるものとし、申し込み不要、参加料無料、参加年齢の制約なし、開催時間内の自由参加といった参加しやすい実施方法を考えた。しかし新型コロナウイルス禍は、企画内容に大きな影響を与えた。そもそもこの時世にあって「にぎわい創出」を目的としてよいのかが、あらためて問われることとなった。

それに対して学生たちが考えたのは、新型コロナウイルスの終息を願って、魔除けをテーマとすることであった。具体的には、地面にロープ杭を打ち、ロープを籠目模様にはって14×18mの大きさを静岡県形の形を描き出す。そしてそのロープに五色のテープを結びつけて吹き流す造形表現を目指すこととなった。古来より籠目文様や五色には魔除けの意味があるためである。

一般参加者も事前広報をせずに積極的に募らないことにしたが、その代わりとしてアマビエなどの魔除けや縁起物を意味する図像をデザイン化した短冊を制作し、学生たちの家族や知人などに願い事を記入してもらう。それを当日、学生たちがロープに結わえ付けていく。現場のイベントには直接参加しないが、学生たちに想いを託す形で間接的に参加していただく。現地の密集、密接を避け、関心を寄せてもらう方法へ転換したのは、窮余の策ではあったが、学生らしいよい発案であったと考える。イベント名も学生案を組み合わせ「魔除けでアート かごめシズオカ」に決定。最終的な企画書をまとめ、静岡市ほかの承諾を得た。

12月5日（土）、6日（日）、イベントを実施。2日間で、一般参加者は63名、見学30名。事前の短冊作成に参加した者は177名。直接、間接あわせた参加者は、合計270名であった（ちなみに前年度は1日開催で一般参加者95名）。



〈実施状況（2020.12.5-6）〉

事業成果

12月の閑散期に、しかも新型コロナ禍のなか直接的、間接的な参加あわせてのべ270名の人に関わっていただき、東静岡のにぎわい創出（というよりもこの地への関心の向上）に寄与できたものと思われる。本学の学生にとっては、地域貢献、生涯学習の実践の場として、座学だけでは学べない多くのことを体験できる機会となった。新型コロナ禍という状況は、学生たちにテーマや造形表現についてのいっそうの考察をせまることにもなったが、その逆境を自分たちなりのアイデアで乗り越えようとしたことは、よい学びとなったであろう。反省会では、準備や各班の連携についての反省とともに、企画から実施までをやり遂げた充実感も報告された。ただし短冊書きで間接的に参加いただいた人たちへのフィードバックは各学生に任せたので、その成果を具体的にはかることができなかったのは反省点である。

今後の展開

東静岡の市有地の活用方法については、多目的アリーナ建設の調査費が予算計上されたものの、新型コロナ禍の影響もあり具体化はしていない。あと数年は何もない芝生広場が存続するであろう。その利活用として、たとえば企画業者などへの事業委託で大型イベントを誘致し、一過的に大量動員をはかる方法も考えられようが、地域住民や学生とによる地道で継続的な活動も有用であることが、3年間にわたる本活動によって示されたと思われる。本助成事業は今回で一区切りとするが、また別の形で静岡市のために若者が参画するイベントを継続していきたい。また本助成事業を3年継続することにより、活動水準は年々進化した。学生たちは先輩の活動を下敷きにより良いものを目指そうとした。こうした学年間をまたぐ発展も、大きな教育成果であった。これも形を変えて続けていきたいと考えている。

下田市における「チーム学校」を実現する支援員の資質・能力向上モデルの在り方

事業担当者

教育学部 初等教育課程 木村 光男、大井 雄平、大学院初等教育高度実践研究科 紅林 伸幸

目的・概要

「チーム学校」が成果を上げるための一助として、特別支援教育支援員（以下、支援員）の資質能力を向上させ、専門性を高める必要がある。しかし、支援員は研修を受ける機会が少なく、教職員との連携が困難な状況下であり、その職責を果たそうと孤軍奮闘する姿を目にする。また、支援員に対する研修は自治体の創意工夫で行う必要があり、とりわけ小規模市町村は研修に割ける予算の影響を受け、十分な研修やサポートが実施困難な状況に直面している。そこで、支援員の資質能力の向上を目的とした研修及び支援モデルを作成し、その意義と課題を提示する。令和２年度は研修会を実施しその前後にアンケート調査を実施した。

事業内容・方法

(1) 事業対象者

研究対象者は下田市立の公立学校で勤務する支援員で、研修会に参加しかつ事後アンケートに回答した 20 名である。勤務校種の内訳は小学校 13 名、中学校 7 名である。

(2) 事業手続き

1) 下田市教育委員会に支援員研修会の企画・実行する同意を得た。2) 事前アンケートの実施

※事前アンケートは、2 項目の自由記述と記名欄を設け配布し 18 名から回答を得た。質問項目は次の通りである。① 日頃児童生徒の支援をしていて相談したいこと、② 講師に聞きたいこと、

3) 下田市支援員研修会

下田市支援員研修会は、令和２年 12 月 14 日にオンラインで実施（支援員と下田市指導主事は下田市公民館で受講）した。講師は事業担当者らである。内容方法は、事前アンケートに基づいて、個別具体的な事例を数点取り上げ、発達障害の特性理解とその支援について、および学級担任との連携の在り方について講義した。

(3) 事業方法

事業方法は、研修会を実施し、その直後に研究対象者に実施した事後アンケートの分析検討による。事後アンケートは、研修会終了直後に用紙（無記名）を配布して実施した。そして、1 週間以内に下田市指導主事に送付してもらった。回答率は 91%であった。事後アンケートの内容は以下の通りである。①支援員の属性・概要（性別、校種、教員免許の有無、経験年数、週当たりの勤務時間・回数）、②支援員の状況（障害の基本特徴の理解、支援の自信、やりがい、児童生徒の困難さ、校内で相談する人・相談相手）、③支援員の研修後の認識である。支援員の研修後の認識については、事後アンケートの回答「③研修後の認識（自由記述）」から、支援員の認識特徴を抽出し、詳細かつ客観性を確保して検討するため KJ 法による質的分析を実施し

た。分析過程では、事前準備として、まず、記述内容毎にカードを作成した。カードには、その要点をコードに付記した。次に、カテゴリー化では、同一のコードを集めた上でサブカテゴリーを抽出した。そして、サブカテゴリーを分析検討しカテゴリーに分類した。

事業成果

(1) 支援員の状況

支援員の状況（研究方法③参照）を表1に示した。

表1. 支援員の状況

項目	障害の基本特徴	自信	やりがい	児童生徒の困難さ	相談する人	相談相手(複数可)
	1.理解していない 2.あまり理解していない 3.少し理解している 4.理解している	1.無し 2.あまり無し 3.少し有り 4.有り	1.無し 2.あまり無し 3.少し有り 4.有り	1.理解していない 2.あまり理解していない 3.少し理解している 4.理解している	1.いない 2.あまりいない 3.少しいる 4.いる	1.校長 2.教頭 3.学級担任 4.養護教諭 5.支援員 6.支援学級 7.その他の教諭
小学校 13名	1... 0人 2... 1人 3... 11人 4... 1人 平均...3.0	1... 0人 2... 3人 3... 9人 4... 1人 平均...2.8	1... 0人 2... 0人 3... 1人 4... 12人 平均...3.9	1... 0人 2... 1人 3... 11人 4... 1人 平均...3.0	1... 0人 2... 0人 3... 2人 4... 11人 平均...3.8	1... 5人(38%) 2... 6人(46%) 3... 6人(46%) 4... 4人(31%) 5... 4人(31%) 6... 1人(8%) 7... 6人(46%)
中学校 7名	1... 0人 2... 0人 3... 5人 4... 2人 平均...3.3	1... 0人 2... 3人 3... 4人 4... 0人 平均...2.6	1... 0人 2... 0人 3... 1人 4... 6人 平均...3.9	1... 0人 2... 0人 3... 6人 4... 1人 平均...3.1	1... 0人 2... 1人 3... 2人 4... 4人 平均...3.4	1... 3人(33%) 2... 2人(22%) 3... 2人(22%) 4... 0人(0%) 5... 3人(33%) 6... 0人(0%) 7... 2人(22%)
平均	3.1	2.7	3.9	3.1	3.7人	小2.6人 中1.3人

(2) 支援員の研修後の認識

「分析の手続き」に従って実施したカテゴリー化では、36のコードから8のサブカテゴリーを抽出し、それを3つのカテゴリー「研修の成果・意義」「研修方法」「その他」に分類した(表2参照)。

表2. KJ法により抽出されたカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
研修の 成果・ 意義	支援の在り方	支援しやすくなった 個の実態からサポートする 支援員の介入が分かった 多様な支援をやってみる 特徴に沿った支援を知った 支援・サポートにつながる 今することやめることが大切 ベストな手助けを考えた 子どものできることを探す 良さを見つけ誉める 安心した 個々に合った支援に 子どもの困りに向き合う 一人一人と向き合うべき 誉めて子どもの味方になる 支援を見直す契機になった 子どもにとっての支援員 子ども理解と関係性 子どものつまずきを優先 感情的に言いすぎた
	自己の見直し・反省	担任の考えと心を合わせる 話す時間を作る コミュニケーションを深める 連携の大切さ 時間が足りない
	担任との連携	発達障害の基本特徴・支援の方向性が勉強に 自己課題の発見
	自己研鑽	
<div> <div>事後アンケートの結果</div> <div>③支援員の研修後の認識</div> <div>分析の手続きに従って実施したカテゴリー化では、36のコードから8のサブカテゴリーを抽出し、それを3つのカテゴリー「研修の成果・意義」「研修方法」「その他」に分類した。</div> </div>		
研修方法	事前アンケートによる事例検討	事前アンケートがよかった 具体的に理解できた 事例を示してくれてわかり易い
	リモート	リモート開催有り難い
その他	今後に向けて	担任との関係をもっと聞きたい 研修を増やして欲しい 支援員に望むことを聞きたい
	生徒が気の毒	教師の叱責 テスト

今後の展開

今後においては、支援員が役割を遂行し易いように、下田市教育委員会と協力し、本研究で明らかになった課題の改善に取り組む必要がある。その中であって支援員への研修内容・方法は、個別具体的な事例を通して、実践力の向上を目指した内容にしていかなければならない。支援員と教職員との連携については、早急に学校と連携して体制づくりを講じる必要がある。また、支援員からは、研修会の機会を増やして欲しいという要望があった。これについては、下田市教育委員会支援員と協議する課題である。

3

多文化共生社会実現に資する外国人住民への支援及び、日本人住民の意識涵養事業

事業担当者

坂本 勝信・山下 浩一・谷 誠司

目的・概要

本事業では、浜松国際交流協会（以下「HICE」）との連携にて、1）外国人住民の社会へのスムーズな適応を促すこと、2）常葉大学大学生の多文化共生の意識を滋養すること、3）多文化共生社会実現に向け、日本人住民の意識涵養を図ること、の3点の目的を掲げた。

しかし、新型コロナウイルス感染拡大が進み、当初の計画を変更し、交流形式を対面からオンラインに切り替える必要性が生じた。以下、変更後の活動内容を記す。

- 1）U-ToC の授業後の会話活動において、会話パートナーとして参加する（前期：最大 11 回）
- 2）天竜日本語教室にて月に 1 回授業者などとして関わる（後期：最大 6 回）

事業内容・方法

活動 1）については、U-ToC の日本語教師・職員がコーディネートを行い、日本語学習者と本学の大学生の交流がスムーズに運ぶよう導いた。また、活動前後には、教師から参加大学生に対して、異文化理解や語学教育に資する留意点を示し、フィードバックを与えるなどした。なお、会話パートナーとしての研究協力に対する謝礼は、本事業の補助金より支出を行った。

活動 2）については、天竜日本語教室自体が HICE 管轄の教室であることから、学習者が集う教室には、毎回 HICE の職員 2 名が出向き、会場設営及び、教室活動の補助作業を一手に担った。本教室は、2020 年 10 月から 2021 年 3 月まで月に一回、計 6 回オンラインにて実施した。学習者は天竜の教室にて受講し、大学生はそれぞれ自宅から参加という形態である。オンラインは Zoom によるものであり、月ごとに授業担当の学生 2 名を決め、その学生が国際交流基金作成の教科書『いんどり』を用いて、生活や職場に必要な日本語を教える全体授業を行った。たとえば、「待ち合わせや仕事に遅れる許可が得られるようになる」という到達目標を掲げた授業日には、文型「～てもいいですか」を取り上げ、その文型が使われる場面や文脈を提示した上で、形式に注目させたり産出練習を行ったりした。その後、Zoom のブレイクアウトルームを利用して、学習者と大学生が 3 つのグループに分かれて、応用練習を実施するなどした。さらに、グループワークでは、毎回学習者と大学生双方が、担当を決めて、Show&Tell（自分が好きなもの・こと・場所・人などを日本語で語る）を行った。発表者の語りを掘り下げたり、詳細を引き出したり、コメントを言ったりする中で、お互いを知ることを目的の一つとした。

活動に必要な機器（i-pad）の購入及び、授業者やグループワーク担当者としての研究協力に対する謝礼は、本事業の補助金から捻出した。

事業成果

本学大学生の参加人数は、活動１）が、９名（経営学部２名、外国語学部７名）、延べ６７名であり、活動２）が８名（経営学部２名、外国語学部６名）、延べ４１名であった。以上二つの活動への参加によって、地域に在住する外国人が日本社会にスムーズに適応するための日本語力向上に一定の貢献をしたと考えている（目的１）。また、本学の学生にとっては、普段接することの少ない外国人とのコミュニケーションの機会を、同じ住民同士として得る場となった（目的２）。さらに、日本語教育の経験を通じて、日常生活や勤務時において外国人が日本語で躰く場面を知る機会ともなった（目的２）。以上の体験は、今後迎える外国人との共生社会の当事者である本学の学生たち（＝日本人住民）の意識涵養に繋がったと捉えている（目的３）。このような目的達成の様子は、本学の学生たちが記した振り返りシート及び、感想文などから読み取れる。

その他に、特に活動２）は、日本語教師を目指すものにとって、貴重な教育実践を行う場となった。本事業には、日本語教員養成課程の科目を受講する者が多く参加したが、授業のための準備と実践、授業後の教員及び、他の大学生からのフィードバックを通して、日本語教授スキルを磨くとともに、新たなビリーフの獲得ができたようである。これらも、振り返りシートや感想文、アンケートへの回答結果などから窺える。

また、本事業の研究者である、坂本、谷は、日本語教室に登壇する本学の学生への教案指導や、授業観察そして、授業後のフィードバックを経て、語学教育・外国語学習に関する多くの知見を得ることができた。その知見を、研究代表者の坂本は、外国語学部グローバルコミュニケーション学科科目「言語の学習と獲得 A・B」に、共同研究者谷は、外国語学部グローバルコミュニケーション学科科目「教案作成指導」等の授業づくりと運営に活かした。また、経営学部のゼミに日本語教育班を有する共同研究者山下は、本学大学生による、日本語学習のウェブ教材開発と、それに関する卒業研究の指導に繋げることができた。

事業成果の発信は、活動１）のオンライン会話パートナーに関しては、本事業の研究者３名と、HICE職員２名が、「地域日本語教育における学習者と大学生のオンライン会話練習の試み—令和２年度常葉大学地域交流・連携推進事業—」というテーマで本学外国語学部の紀要にて行った。また、活動２）の天竜日本語教室については、2021年６月19日に開催された、浜松市主催（主管：HICE）のWebセミナー「大学と連携した地域日本語教育に携わる人材養成のあり方」にて、坂本と谷及び、参加学生代表２名などが報告を行った。

今後の展開

令和３年度常葉大学地域交流・連携推進事業（テーマ名：外国人住民への支援と日本人住民の意識涵養を通じた多文化共生社会実現の試み）の採択を受け、令和２年度の事業内容を発展的に継承している。具体的には、天竜日本語教室での交流を、学習者と日本人大学生の相互理解の場として位置付ける。本活動への取り組みを通して、大学生に、１）主体性を育む、２）内省を経て、改善する、３）多文化共生意識を涵養する、４）コースデザインの必要性に気づく、などの目的を達成してほしいと考えている。さらに、学習者には、Show&Tellの成果を日本人の前で発表する機会を提供し、今後日本で生きていく自信に繋げてもらいたいと願っている。

スポーツによる地域活性化を目指した 「ベルテックス静岡」との連携事業

事業担当者

教育学部生涯学習学科 木宮敬信（代表）、経営学部経営学科 細江哲志

健康プロデュース学部心身マネジメント学科 木村佐枝子、経営学部経営学科 山田雅敏

保健医療学部静岡理学療法学科 栗田泰成

目的・概要

地域貢献活動を研究・教育に溶け込ませるような活動として行う「アクションリサーチ」の一環として、地域活性化を目的としたスポーツチームとの連携を行う。学生のマンパワーを提供するボランティア派遣ではなく、教員および学生の専門性を活かした連携を目指している。「学生が学んだ知識を実践できる場を提供してもらい将来につながる学びの場となること」「教員にとって研究成果の地域還元や新たな研究領域の開拓につながること」「大学にとってメディア露出が増えるとともに、多くの観客に直接大学での学びを伝えることができること」等の利点が大学にあり、「不足する専門的知見を補うことができること」「若者のセンスを活用することができること」「地域密着型チームのイメージ向上につながること」等の利点がチームにある。加えてチームのスポンサー企業とも連携していくことが本事業の特徴と言える。スポンサー企業にとっての利点は、学生とともに活動していく長期インターンシップの側面を持ち、リクルート活動につなげられることや、企業の若手社員が学生とともに研修を行うことにより社員研修の側面を持つことにある。地方の中小企業にとってはリクルートや社員研修にかかる経費は大きな負担であるため、本事業にスポンサーとして経費支出を行ったとしても十分な見返りが見込める。学生やチームにとっては、この企業からのスポンサーフィーが活動費として使えるため、より実践的な活動を行うことが可能となる。

事業内容・方法

年度当初は、2020年9月からのホームゲーム開幕に合わせて、学生をそれぞれの専門性をもとにグループ化し、それぞれのグループに関連するスポンサー企業を集め、研修およびイベント等の企画、運営を行う予定であった。しかし、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、前期中の学生を集めた研修を行うことができなかったことに加え、ホームゲームイベントの開催そのものが困難になったことから、事業計画を変更することとなった。また、シーズン開幕が2020年11月と変更されたこともあり、9月から具体的事業を開始することとした。なお、全体の企画コーディネートは(株)トムスが担当し、スポンサー企業の募集や行政との連携についてはチーム（ベルテックス静岡）が担当した。

【計画変更のポイント】

- ・学生をグループ分けせず全体で一つの目的を設定して活動する
- ・実際のイベント開催ではなく、チームの集客アップやイベント等の企画立案を目的とした研修を行う

- ・立案した企画を行政や関係者に向けてプレゼンテーションする場を設定する
- ・研修内容や立案した企画内容をホームゲームで展示ブースとして公開するとともに来場者アンケートを行い、翌シーズンに向けた参考資料をまとめる
- ・参加希望学生全員が参加するのではなく、研修やプレゼン参加は上級生を中心としたリーダー候補の学生のみとし、それ以外の学生はホームゲームへの希望参加やプレゼン等へのオンライン参加とする

☆研修

イベント企画等の立案に必要なスキルを身に付けるための研修を企業と連携して実施した。

第1回：2020年9月26日（場所：ナナクレマホール） 内容：リーダー研修（ブレインストーミング）

講師：面白法人カヤック（<https://www.kayac.com/>） 田中彬士氏

第2回：2020年10月31日（場所：静岡商工会議所） 内容：リーダー研修（イノベーション思考法）

第3回：2020年11月21日（オンライン開催） 内容：企画立案

第4回：2020年12月3日（オンライン開催） 内容：プレゼンテーション

講師：医療法人R&Oグループ 渥美直人氏

☆プレゼンテーション

研修の中でまとめたイベント企画等について、Bリーグチェアマン、行政（静岡市）、チーム代表へプレゼンテーションを実施した。

2020年12月12日：（場所：MY PACE FITNESS GYM 草薙）

内容：市長、Bリーグチェアマン、行政関係部署へのプレゼンテーション

「ベルテックス静岡の観客動員を増やし、地域活性化に役立てるためには」

☆ホームゲームブース展示

イベント開催の代わりに、これまでの取り組みの内容について映像やポスターによるブース展示を行った。

2021年2月13日、14日、20日、21日、3月20日、21日（場所：静岡市中央体育館）

事業成果

イベント実施が困難な状況であったため、企画プレゼンテーションを本年度の最大の目標とした。12月のプレゼンテーション発表会では、市長、Bリーグチェアマン、静岡市スポーツ関連部署、ベルテックス静岡代表取締役をゲストに招き、各グループの企画プレゼンテーションを行い高い評価を得た。また、プレゼンテーションに当たっては、学生とスポンサー企業社員が協働で行ったため、相互に学びの機会が得られた。

ホームゲームにおいては、こうした学生と企業の取り組みや、グループによるプレゼンテーションの内容に関する展示ブースを設置した。また、研修等の様子をグラフィックレコーディングにまとめたものを展示した。多くの来場者に見ていただくとともに来場者アンケートで様々なご意見を頂戴した。来シーズンにイベントが解禁された暁には、これらを踏まえ実現させていきたいと考えている。

今後の展開

本事業は令和3年度も継続採択されている。Bリーグの翌シーズンは、2021年9月～2022年6月までである。ホームゲームイベントが解禁されるかどうかは新型コロナウイルス感染症の状況次第であるが、開幕へ向けて、チームと協議をしながら準備を進めていきたい。また、新たに参加する学生については、昨年度要用の研修機会を提供する予定である。

教員による地域連携活動 ～動画配信～

日頃より、常葉大学の地域連携活動にご理解とご協力を賜わり、ありがとうございます。

地域貢献センターでは、地(知)の拠点としての大学の役割・機能を発揮するため、本学における地域交流・連携活動を地域社会に広く周知することを目指し活動しています。

コロナ禍で活動や発表の場を失った事業が多い中、より多くの方に向けて本学の教育研究活動を発信することを目的に、教員が地域で実施した活動成果等を動画で発表する取り組みを実施することとなりました。

日頃の地域活動等の成果を発信し、本学が取り組んでいる地域連携活動を知っていただく機会として、これからも発展的な地域連携活動が促進されることを期待しています。

本日紹介した動画や、その他の教員による地域連携活動の動画は、常葉大学ホームページの地域貢献特設サイト内でいつでもご覧いただく事ができます。

(大学ホームページより、「地域貢献」→「教員による地域連携活動〔動画配信〕」に進んでください)

ホーム > 地域貢献 > 教員による地域連携活動〔動画配信〕

教員の地域連携活動の成果報告〔動画配信〕について

〔ご挨拶〕
 地域貢献センターでは、地(知)の拠点としての大学の役割・機能を発揮するため、本学における地域交流・連携活動を地域社会に広く周知することを目指し活動しています。
 コロナ禍で活動や発表の場を失った事業が多い中、より多くの方に向けて本学の教育研究活動を発信することを目的に、教員が地域で実施した活動成果等を動画で発表する取り組みを実施することとなりました。
 日頃の地域活動等の成果を発信し、本学が取り組んでいる地域連携活動を知っていただく機会として、これからも発展的な地域連携活動が促進されることを期待しています。





あそぼうあそぼうABC at リンク西奈

教育学部初等教育課程・教授 永倉由里

〔要旨〕あそぼうあそぼうABC at リンク西奈 (PDF ファイル 0.2MB)



Withコロナ時代に求められる駅前広場の将来像の提案

教育学部心理教育学科・教授 佐瀬竜一

〔要旨〕Withコロナ時代に求められる駅前広場の将来像の提案 (PDF ファイル 0.21MB)



島田市田代地区の自然環境保全PR



常葉大学
教員の地域活動等の紹介事業

動画配信 1	あそぼうあそぼう ABC at リンク西奈 (小学生対象の英語活動ボランティア)
-----------	---

事業担当者

教育学部 初等教育課程 清 万利子、大富 綾乃、森下 佳樹、瀧口 大生、谷口 光平、堀内 美咲、田中 杏樹、村上 夏輝、村山 舞、田京 芳野、スミカワ マユミ、鈴木 里安 他9名

目的・概要

静岡市西奈生涯学習センター（リンク西奈）との共催事業で、企画・事前準備・記録等のすべてを学生が担っている。小学校での外国語活動をひかえた2年生を対象とした「英語あそび」を通して、学生とのふれあい、子ども同士のふれあいを楽しんでもらう事業である。

秋には「ハロウィン」、年末には「クリスマス」にちなんだプログラムを展開させるほか、「アルファベット」「色」「数」「好きな食べ物・動物」「英語で理科実験」「絵本・パネルシアター」など、その内容は、年ごとに充実したものになっている。子どもの興味関心を喚起し、ヘー〜という“気づき”と相互に関わることで生まれる“親しみと喜びの実感”を大切にし、学生たちも大いに楽しんでいる。

既存のサークルやいわゆるゼミのメンバーではなく、それぞれの思いを胸に集まった「有志」であることも特徴である。先輩・後輩の隔たりなく、対等な関係が保たれ、率直な意見交換がなされ、子どもたちとのふれあいの機会を、それぞれの課題解決に活かしている。



ハロウィン・プログラム（絵本）



ハロウィンってなあ〜に（パネル・トーク）

事業成果

リンク西奈の中でも人気の講座で、参加児童とその保護者からの評価も高い。教員を志望する学生にとって貴重な経験であり、人間力の向上につながっている。2019 年度地域交流・連携推進事業。

With コロナ時代に求められる駅前広場の将来像の提案

事業担当者

教育学部 心理教育学科 佐瀬 竜一（代表） 教育学部 心理教育学科 佐瀬ゼミ所属3年生

目的・概要

静岡駅は市外・県内からの利用客も多い静岡県内の主要駅である。駅前広場が、新型コロナウイルス感染拡大による生活様式の変化に伴い、今後どのような役割を担うべきかを見出すことが課題となっている。この課題に対応するための知見を得るために、１）～３）を実施した。

1) 研究 1 : 静岡駅前を利用する大学生やその関係者を中心に幅広い年齢層に対して静岡駅前に関する認識調査を Google フォームにて行い、利用者にとって静岡駅前広場がどのように映っているのか、静岡駅前広場にはどんな強みがあるのか、今後何があるとよりよいと思うのかなどについて KJ 法を援用して分析した。

2) 研究2：類似の規模、地理的条件の駅前担当者に聞き取り調査を行った。

3) 研究3：上記2種の調査により集めた情報をまとめて、まとめた情報を基に駅前広場の役割や将来像について学生および静岡市役所都市局都市計画部市街地整備課職員で対話するオンラインワークショップを行った。ワークショップでは静岡市働き盛りの社会人をペルソナ（架空の利用者）として想定して、ペルソナから見た理想の駅前色場をカスタマイザーニーの手法を用いて考察した。

[illegible]

事業成果

静岡駅前広場にある強みを言語化し発信する必要性が示唆された。一定のスペースが存在し、自然と密になりにくく様々な施設への行き来がしやすい静岡駅前広場は With コロナ時代に必要な駅前広場の要素の一部を既に有していると考えられる。また、視覚・聴覚・嗅覚などを活用してリラックスできる情報（空間）や実用的な情報（アルコール消毒の設置場所、お手洗いの場所）、駅施設位置やイベントの分かりやすい情報が提示すること、および提示されていることを利用者に認識してもらうことの必要性が示唆された。

本事業で協働した静岡市役所都市局都市計画部市街地整備課からは、視覚や嗅覚、細かい心情に沿って考える手法および提案が「ひと中心の空間づくり」につながる可能性があるとの評価をいただいた。

島田市田代地区の自然環境保全対策 PR ～ エモマップ制作の活動を通じた情報発信 ～

事業担当者

経営学部 経営学科 山田 雅敏（研究代表者／情報学ゼミナール）

経営学部 経営学科 4 年 伊藤遼也（学生代表） ， 根上麗音（学生副代表）， 他， 3 名

目的・概要

本研究は島田市田代地区の自然環境保護対策に関して、エモマップを制作することにより可視化し、SNS やホームページを利用して PR することを目的とした。ここで、エモマップの「エモ（い）」とは、emotional（エモーショナル）に由来し、「感情が動かされた状態」という意味を持つ若者ことばである。同地区の自然環境保護対策のストーリーについて「エモい」を表現するために、若者に人気が高まるレンズ付きフィルム「写ルンです」を使用して撮影を行った。またエモマップを制作するにあたり、島田市地域生活部環境課の協力をはじめ、島田市民へのインタビュー調査や、市在住のイラストレータ・デザイナーが、本学経営学部の情報学ゼミナールと連携し実施した。

事業成果

エモマップ制作の活動は、島田市の公式 Facebook や常葉大学公式ホームページにより情報発信された他、3 月末には島田市長の表敬訪問も実施され、その様子が新聞紙面に掲載されたことから、田代地区の自然環境保全 PR に関して一定の効果があつたことが示唆された。

今後の課題として、エモいという感覚的な事象は、言葉に表現し難い暗黙知的の性質を持つ場合が多く、言語化やイラスト化の段階で修正作業が発生したことが挙げられる。また、田代地区には地球環境に優しいエネルギーを目指す田代環境プラザや、温泉施設や多目的スポーツ・レクリエーション施設が多くあり、これらの施設に関する情報を積極的に発信することで、環境との調和がとれた自然豊かな里山としての田代地区の認知が促進されることが考えられる。



「写ルンです」による撮影と調査風景



島田市長への表敬訪問の様子

FULL-SATO プロジェクト

事業担当者

造形学部 山本浩二、垂見幸哉 教育学部 長橋秀樹

目的・概要

FULL-SATO プロジェクトとは、2017 年度から始まった「松崎町のうた」を作り上げていくという文化プログラムである。常葉大学教員と文化芸術アソシエイツによって立ち上げられて以来、現在までに 100 を超える歌詞が生み出され、その数は今もなお増え続けている。このプログラムは初めに作曲家によって曲が作られ、そのメロディに対して町民がそれぞれの思いを歌詞に込めていくという内容である。日常の些細な出来事から雄大な自然、あるいは町にゆかりのある偉人など様々なテーマの歌詞が町民一人ひとりの心情を表しており、それらの総体が「松崎町のうた」となる。このプロジェクトには当初から本学造形学部と教育学部の教員、学生が参画しており、歌を作るという音楽的プログラムに対して映像などの美術的アプローチにより活動内容の幅を広げている。活動を進めていく中で松崎町民有志による「松崎町のうたを育てる会」が組織され、広く町民に浸透していくことになった。

初年度は曲の周知活動、2 年目はワークショップなどによる歌詞作りとコンサート活動、3 年目はそれらの集大成としてのコンサートを行った。

町民が町の歌詞を作るという活動に参加することで、改めて地域について思いを巡らせるとともに誇りと愛着を醸成する活動となっている。

事業成果

2017 年以来 2019 年までに 5 回のコンサートを実施、とりわけ 2019 年 12 月の「松崎町のうたコンサート 町民が紡ぐ歌語り」では出演者 150 名、観客 500 名で会場は過密状態となるほどだった。全曲「松崎町のうた」しか演奏しないというコンサートは地元の音楽愛好団体やダンスクラブ、太極拳クラブなどがそれぞれ歌詞の内容に合わせて舞台を作り上げ、大好評を博した。初年度は文化庁の委託事業、2 年目はこどもゆめ基金と丸高愛郷報徳基金、3 年目は静岡県文化プログラムによる助成金を獲得し、コンサート活動意外にも WEB サイト運営、各種ワークショップ実施、映像コンテンツ制作、カラオケ CD 制作、DVD 制作などが成果として挙げられる。また、2021 年春から町内の時報チャイムとして松崎町のうたが採用され、1 日 3 回、異なる音源で町にメロディが流れている。

防犯・交通安全アプリを活用した 「しずおかランニングパトロール」の実践活動事例

事業担当者

健康プロデュース学部心身マネジメント学科 木村 佐枝子
常葉大学ランパト隊：17名

目的・概要

社会に貢献できる人材育成は高等教育の重要な使命である。本活動では、地域連携型の防犯教育に焦点をあてる。大学生が防犯ボランティアに参加することで、規範意識の向上や加害者・被害者となる防犯抑止や効果が期待できる。また、規範意識を向上させることで結果として地域の犯罪抑止や安全安心なまちづくりに貢献することが可能である。

大学近隣の小学校区において、児童の下校見守り活動を目的に静岡県全域で実施されている「ランニングパトロール」を実施する。その際に、香川大学開発アプリ（防犯ウォーキング/交通安全ヒヤリハット）を用いて、地域の安全・危険箇所、ヒヤリハットの場所を地図上のアプリにプロットしていく。

<活動のフロー>



事業成果

事前事後の活動に行ったアンケート調査から、活動した学生の防犯意識や交通安全の意識の向上が見られた。アプリを活用したことで「危険箇所の写真を取り共有することにより、全員が共通意識を持つことが出来た」「危険箇所の把握を的確に行うことができた。アプリを使うことでただランニングパトロールを行うよりも危険箇所が記憶に残りやすい」という自由記述が見られた。本活動は学生が地域と連携して行う活動であり、ランニングパトロールを実践することにより、地域の抑止力となり、防犯や交通安全に貢献することができる活動であると考えられる。

<連携先> 香川大学産学連携・知的財産センター、静岡県警察本部

NTT ドコモ東海、浜松市デジタルスマート推進本部

*活動にあたり、香川大学産学連携・知的財産センターよりアプリの提供と浜松市のコーディネートにより NTT ドコモ東海から無償のタブレットを提供いただきました。

地域における音楽指導活動 ～吹奏楽、管弦楽～

事業担当者

常葉大学短期大学部音楽科 井上幸子

目的・概要

地域における音楽活動。本事業は、自身の専門楽器であるクラリネットを通して、地域の中高生や一般の音楽愛好家の皆さんに、広く音楽の楽しみ方、演奏の方法を知ってもらうことを目的としている。

1. 中高生への指導
2. 一般愛好家の方への指導
3. 地域公共施設との音楽事業連携
 - 3.1 吹奏楽 清水文化会館主催 マリナートウインズにおける活動紹介
 - 3.2 管弦楽 グランシップ静岡 音楽の広場における活動紹介

事業成果

中高生への指導活動において、多くの学校が吹奏楽コンクールでの上位入賞を果たすなど、高い成績結果を残すことに貢献することができた。一般愛好家の方との活動では、演奏の楽しみ方、楽器の吹き方をお伝えするとともに、そこで知り合う人々をつなげる役割を果たし、より結束の高いコミュニティを作り上げることができた。

コロナ禍で制限された活動も多い中でも、皆さんが音楽を通して得る経験を諦めずに模索し、制限下だからこそ得た音楽を奏でる喜びも大きく、その様子も紹介したい。

学生による地域連携活動 ～事例報告～

◆ 文部科学省高等教育政策室作成の「大学による地方創生の取組事例集」に本学が取り上げられました

文部科学省では、学生の学びを豊かにする観点から、都市部の学生が地域を知り、地方創生の取り組みや地域の活動に触れる機会の創出を支援しています。その事業発信の一環として、「地域で学び、地域で支える。」をキーワードに、大学による地方創生の取組事例集が刊行されました。全国38大学の事例が掲載される中に、学生の自発的な地域貢献活動を支援している本学の取り組みが紹介されています。

▶ 大学の取組事例23

学生の自発的な地域貢献活動を 引き出す「ここは未来塾」

常葉大学 × 静岡県静岡市・浜松市等

学生の9割が県内出身者

常葉大学は、静岡県静岡市の草薙、瀬名、水落と浜松市の合計4か所にキャンパスを展開する10学部19学科の総合大学だ。教育・研究に加えて、「地域貢献」という大学の使命を果たすために、2018年に「地域貢献センター」を開設した。それぞれの専門分野を生かした産学官連携を推進するため、草薙・水落・浜松キャンパスの地域貢献課と浜松キャンパスに設置された「社会貢献・ボランティアセンター」とで全学的な「地域貢献センター」を構成している。また、産学官連携のほか、公開講座の運営やボランティア募集の受付・情報提供等も地域貢献センターが担っている。地域に開かれた大学を目指して、組織的に地域への貢献を促進する取組だが、その背景には、常葉大学の学生の9割が県内出身者、その多くが県内に就職しているという状況がある。大学と地域との結び付きは元々強く、学生が地域で活動する素地があった。

学生の自発的な地域貢献活動を支援

常葉大学は、静岡県下の5市町、5団体、2機関の計12団体と包括的連携協定を締結している。それらの団体と協働して、例えば2019年度には、保育学部の「非認知能力を高める保育実践開発プロジェクト」などの交流事業を5件、外国語学部の「大井川鐵道沿線地域の活性化」などの地域貢献事業を5件、造形学部の「紙芝居『さのつねたみものがたり』原画制作」などの連携事業のように、各学部の特性を生かした多種多様な活動を実践しているほか、学生

のボランティア活動も数多く実施している。

静岡市内キャンパスの有志によるボランティアサークルは「Link」という学内公認組織に統括されていて、地域貢献課がその活動を支援し、独自企画のボランティア活動に取り組んでいる。また、浜松キャンパスのサークル、クラブなどで社会貢献・ボランティアセンターに登録している団体は「ココスタ」と呼ばれ、各団体の特色を生かして地域のイベントなどに参加している。このような学生の自主的な地域貢献活動を教育研究活動に落とし込んだ取組が「ここは未来塾～TU can Project～」だ。

このプロジェクトでは、学生の自主的・自発的な取組に対して、大学から教員アドバイザーによる助言や、活動資金の援助などの支援を行う。大学がバックアップする取組だけに企画は厳しく審査され、学生の企画力や遂行力も試される。2019年度は、応募のあった26件の企画を審査した結果、「三保いっこと〜世界文化遺産からの招待状〜」や「石部棚田の魅力をぎゅぎゅっと伝え隊」などの15件が採択された。この事業終了後には報告会が開催されて、須佐淳司地域貢献センター長から、この事業を通じた地域貢献と学生自身の成長を期待する言葉が贈られた。学生のアイデアと行動力が地域活性化に結び付き、学生の社会性の醸成につながる取組だ。

HINT for 自治体

学生の自主的な地域貢献活動によって
地域が活性化



松崎町石部棚田の
収穫祭



村井ゼミ サイエンスカフェ



田中ゼミ
自治体職員向け
建物被害調査プログラムの
開発と試行



ここは未来塾オンライン報告会

◆ オリパラ教育推進事業

浜松市内小・中学校での活動を実施しました

10月5日（月曜日）にオリパラ教育の授業が浜松市立中ノ町小学校で行われ、本学健康プロデュース学部木村ゼミが5年生の児童を対象に同ゼミで作成したすごろくを使用してSDGs（持続可能な開発目標）の達成に向けたスポーツの役割について授業をしました。

児童は、4人1組になってスポーツSDGsすごろくを行い、3択形式のクイズを交えながら、SDGsについての知識を深めていきました。

中ノ町小学校は、日頃からSDGsを学習していることもあり意識がとて高く、すごろくという親しみやすい方法で楽しく取り組むことができました。参加した松井統哉さん（心身マネジメント学科3年）は「分からない問題やワードについて聞きに来てくれる児童もいて、SDGsについて積極的に取り組んでくれていることが伝わってきた。また、問題に対して自分の答えをしっかりと答えていて、熱心な姿勢が伺えた」と話しました。子どもたちに教えることで学生らも気付きがあり、とても良い経験になりました。

本事業は、浜松市内の5大学で組織するオリパラ教員浜松市内大学連携協議会の取り組みの一環として行われ、教育推進校23校を5大学で分担しています。中ノ町小学校は浜松医科大学の担当校となりますが、大学間の垣根を越えた活動となっています。



10月30日（金曜日）、常葉大学に事務局をおくオリパラ教育浜松市内大学連携協議会の依頼を受け、本学陸上サークルの学生3名が浜松市立花川小学校で「けがをしないで楽しく走る」というテーマで走り方の指導をしました。

花川小学校では11月に持久走大会を予定しており、今回は「大学生と走ることによって児童に走る楽しさを体験して欲しい」と依頼を受けました。

指導した保健医療学部理学療法学科4年 以西昭海さんは、将来、スポーツ分野で活躍できる理学療法士を目指しており、高校時代までの陸上経験と大学で学んだ身体の動きに対する知識を生かし、「けがをしないためには準備運動が大切」と運動前の簡単なドリルを紹介しました。「ドリル」という言葉に、児童は「計算ドリル?」「穴をあけるドリル?」と元氣よく質問し、早い段階で学生と打ち解けていました。

学生の説明のあと、児童は体の動きを意識しながら楽しそうに、3つのドリルに取り組みました。なかなか思うようにできない児童には、学生が声掛けをし、一人ひとり丁寧に対応していました。また、腕振りや手の握り方も伝え、最後に低学年は3分間、高学年は5分間走に挑戦しました。

終了後、児童の発表があり、「ドリルをやったことで、痛みを感じなかった。楽しかった」「普段やらないトレーニングができて楽しかったし、続けたと思った」「今日習ったことを意識して、持久走大会でよい記録を出したい」など、前向きな感想が聞かれました。

参加した理学療法学科4年 酒井雄飛さんは「児童からたくさんの元気をもらった。指導から学ぶものも多く、この経験を別の形で生かしたい」と語りました。



12月11日（金曜日）、浜松市立篠原中学校で、オリパラ教育推進授業として、本学障がい者スポーツサークル「障スポ☆SC」（保健医療学部）の学生と櫻井准教授がポッチャの体験授業を行いました。この日参加したのは1年生4クラス132名で、2クラスずつ4コートに分かれ体験しました。

チームに分かれた生徒たちは、投球の位置や投げ方や順番など、自分たちで考えながら勝つための方法を試行錯誤していました。

終了後、篠原中学校の先生方からは「普段はおとなしい生徒でも積極的に参加して楽しんでいた」といった感想が聞かれ、だれでも楽しめるスポーツということを実感してもらえたようでした。

活動に参加した松本幸志郎さん（保健医療学部理学療法学科3年）は、「ポッチャをやったことがあるという方が増えてきている気がする。サークルの活動で学んできたことを還元することができた。来年のパラリンピックではぜひ日本代表を応援してポッチャを楽しんでほしい」と語りました。



◆「草薙カルテッド」の活動を紹介するマップとポスターを作成しました

造形学部土屋ゼミでは、「草薙カルテッド」の活動を紹介するマップとポスターを作成しました。

「草薙カルテッド」とは、草薙のまちづくりを担う社団法人で、地域の自治会、商店会、大学等で構成されています。静岡県下第一号の都市再生推進法人でもあります。この存在と活動を広める課題を静岡市から指定され、ふじのくに地域大学コンソーシアムのゼミ学生等地域貢献推進事業を受けて取り組みました。

マップはNPOまちなびと協力し、「子どもとつくったお店マップ」と表裏になったもので、地元や関係機関で配布されています。ポスターは写真家 杉山雅彦さんの撮影したモニタージュ写真と紹介文を組合せ、草薙駅北口の掲示板に張り出されています。



草薙駅北口



◆「静岡市民文化会館のミライを描く」市民ワークショップに法学部の学生が参加

法学部の学生4名が静岡市民文化会館の創作的改修の具体的な内容を検討する市民ワークショップに参加しています。

静岡市は、昨年度策定した「静岡市民文化会館再整備方針」に基づき「より使いやすく、創造活動に寄与する劇場づくり」を目指しています。今後、3回開催される市民ワークショップの意見を参考に改修内容の方向性を検討、整理して「静岡市民文化会館基本計画」を定める予定です。このワークショップに、法学部の学生で学生の視点から大学周辺地域の活性化に取り組むサークル「ミズオチ交流会」のメンバー4名が参加しています。

11月12日（木曜日）の第1回は、改修案の「絶賛ポイント・困りポイント」を洗い出し、「さらに良くなるには」を考え、「新施設の売り」の検討を行いました。4名の学生は積極的に発言し、様々な年代の方と熱心な意見を交わしました。

法学部では、引き続き、産学官連携に積極的に取り組んでいきます。



■静岡草薙キャンパス

〒422-8581 静岡市駿河区弥生町 6-1

TEL. 054-297-6100 (代表)

教育学部 外国語学部 経営学部

社会環境学部 保育学部

大学院 国際言語文化研究科

初等教育高度実践研究科

環境防災研究科

短期大学部 日本語日本文学科 保育科

■静岡瀬名キャンパス

〒420-0911 静岡市葵区瀬名 1-22-1

TEL. 054-263-1125 (代表)

造形学部

短期大学部 音楽科

■静岡水落キャンパス

〒420-0831 静岡市葵区水落町 1-30

TEL. 054-297-3200 (代表)

法学部 健康科学部

■浜松キャンパス

〒431-2102 浜松市北区都田町 1230

TEL. 053-428-3511 (代表)

経営学部 健康プロデュース学部

保健医療学部

大学院 健康科学研究科